

2012年度 中央大学共同研究費 一研究報告書一

研究代表者	所属機関	文学部		2012年度助成額
	氏名	石井 正敏		2,123 (千円)
	NAME			
研究課題名	和文	先史～古代環日本海地域史・交流史の再構築		研究期間 2010年度 ～2012年度
	英文			

1. 研究組織

	研究代表者及び研究分担者		役割分担	備考
	氏名	所属機関/部局/職		
1	石井 正敏	中央大学・文学部・教授	研究総括、文献史学	研究代表者
2	白根 靖大	中央大学・文学部・教授	東北地方沿岸地域史研究	研究分担者
3	小林 謙一	中央大学・文学部・准教授	考古学、年代測定	研究分担者
4	工藤 雄一郎	国立歴史民俗博物館・考古研究系・助教	先史学、年代測定、古環境復元	学外研究分担者
5	中澤 寛将	青森県教育委員会・文化財保護課・職員	ロシア極東地域、サハリンの研究	学外研究分担者
6				
7				
8				
9				
10				
11				
12				
13				
14				
合計		5 名		

2. 研究の概要（背景・目的・研究計画・内容および成果 和文 1000 字程度、英文 100word 程度）

（和文）

本年度は、研究の最終年度のため、これまでの研究の総まとめを目指し、これまでに蒐集した資料の整理と分析と国内における資料調査を実施した。計画していた一部の国内とロシア・韓国への調査は代表者石井正敏の体調不良によって断念せざるを得ず（別紙参照）、結果的に予定していた海外での現地調査を実行できなかった。この点、まずお断りしなければならない。ただしメンバーによる調査と報告・研究会による共同研究の成果は得ることができた。これらの成果は順次発表していく予定である。

さて、石井は、朝鮮半島東海岸と日本との交流を示す日本・朝鮮史料の蒐集と研究を進め、755年に日本からの帰途遭難して慶尚北道に漂着したとする説話を新たに見出すことができた。昨年実施した浦項とあわせて、新羅の都慶州に近い東海岸地域の歴史地理の重要性についてあらためて注目し、今後さらに検討を進めたい。この他、主たるテーマとして渤海との関係については、渤海の使者が熊本県天草に漂着している例を取り上げた研究を進め、熊本県山鹿市にある鞠智城遺跡に関するシンポジウムで講演を行った。

小林は、これまでおこなった朝鮮半島での新石器から青銅器時代の遺跡調査成果特に年代測定成果の分析と、比較研究するための日本列島での遺跡研究、特に縄文文化の中心である関東地方から東北・北海道地方の遺跡研究、年代測定研究を中心におこなった。特に朝鮮半島の新石器時代中期から後期および青銅器時代前・中期に比較される福島県井出上ノ原遺跡（縄文・弥生時代）、神奈川県大日野原遺跡（縄文時代）の発掘調査成果について、院生を補助員として出土遺物及び調査遺構の整理作業を完成させ、報告書を刊行した。昨年度にまとめた朝鮮半島新石器時代年代研究、今年度にまとめた朝鮮半島青銅器時代における年代比較が可能となる見通しが持てた。また、朝鮮半島の年代研究についてもデータを集成したので、その成果についても論文にまとめていく予定である。工藤は、旧石器～縄文時代にかけての日本・ロシア・中国南部の比較を論じた。先史時代の環日本海における相互関係を明らかにしていく基盤を構築できた。

白根は古代から中世にわたる文献史料の調査・研究とともに、現地調査としては後三年合戦の舞台となった横手周辺の遺跡調査を行った。具体的には、大規模な山城であることが明らかになった大鳥井山遺跡、新たに金沢柵跡と推定されている陣立遺跡などについて、新知見を得た。

中澤は共同での調査の機会はなかったが、ロシアにおける考古学調査を単独で実施した。主にロシア沿海地方ハサン地区のポシエツ湾沿岸域において靺鞨・渤海遺跡の踏査を実施した。ポシエツ湾沿岸域は、日本・渤海間の交渉の窓口とされ、クラスキノ城址をはじめとする渤海代の遺跡が多数点在する。

なお古代都市史を専門とする吉田歆氏を招き、公開研究会を開催した。吉田氏は、古代における日本・中国・朝鮮・渤海の都城を比較する研究に実績を持っており、この共同研究プロジェクトにうってつけの研究者として研究報告をお願いした。今回の報告は、日本における古代都城制の受容と展開を中心に、古代の宮都から中世初期の平泉に至る都市史について、その展開過程を展望するという視野の広いものだった。公開研究会への参加者は、共同研究プロジェクトのメンバーのみならず、大学院生も加わり、考

古学・古代史・中世史の各方面から議論を交わすことができた。

3. おもな発表論文等（予定を含む）

【学術論文】（著者名、論文題目、誌名、査読の有無、巻号、頁、発行年月）

石井正敏『『日本書紀』隋使裴世清の朝見記事について』『芸林』61-1, 芸林会（京都）, 査読なし,
pp43~76, 2012年4月

石井正敏「貞観十一年の震災と外寇」歴史学研究会編『震災・核災害の時代と歴史学』, 青木書店（東
京）, 査読無し, pp282~302, 2012年5月

小林謙一「日本先史・古代竪穴住居の構築材の年代測定による住居構築年の研究」『国立歴史民俗
博物館研究報告』第176集, 国立歴史民俗博物館（千葉）, 査読あり, pp.5-56, 2012年12月

小林謙一「韓国青銅器時代集落の炭素14年代測定」『紀要』史学第58号（通巻246号）,
中央大学文学部（東京）, 査読なし, pp.1-40, 2013年3月

小林謙一・茅野嘉雄「二股(2)遺跡出土試料の14C年代と安定同位体比測定による分析」『研
究紀要』第18号, 青森県埋蔵文化財センター（青森）, 査読なし, pp.1-24, 2013年3月

小林謙一・坂本稔・村田六郎太・加曾利貝塚土器づくり同好会「研究ノート 縄文土器製
作に関する予備的実験—縄文時代草創期土器の混和材による縮小率の検討—」『国立歴史民

<p>俗博物館研究報告』第 175 集,国立歴史民俗博物館 (千葉),査読あり, pp.163-195,2013 年 1 月, 中澤寛将 「渤海から女真 (金・東夏) における日本海沿岸交流に関する考古学的研究」『高梨 学術奨励基金年報 (平成 23 年度)』、財団法人高梨学術奨励基金 (東京)、pp.173-180,2012 年</p>
<p>【学会発表】 (発表者名、発表題目、学会名、開催地、開催年月)</p>
<p>工藤雄一郎 「古本州島における細石刃石器群の年代と古環境 戸沢充則先生追悼シンポジウム 細石刃石器群研究へのアプローチ」,日本旧石器学会 2012 年 7 月,浅間縄文ミュージアム (長野)</p>
<p>Kudo, Y. Utilization of plant foods and the earliest Jomon pottery in the late Glacial Period. IPC XIII/IOPC IX 2012, SS29: Use and management of plant resources in prehistoric periods in East Asia. Chuo University (東京), 23-30th August, 2012.</p>
<p>中澤寛将 「渤海平地城の成立をめぐる諸問題」『第 14 回北アジア調査研究報告会要旨集』北ア ジア調査研究報告会実行委員会, pp.33-36, 2013</p>
<p>中澤寛将 「クラスキノ城址出土土器の特質とその意義」『国際シンポジウム 渤海を掘る X - 沿海州渤海古城クラスキノ古城の機能と性格-』,青山学院大学 (東京), 2013</p>
<p>小林謙一・矢島良多・河本雅人 「炭素 14 年代測定を利用した縄文時代中期重複住居群の分析」 『日本考古学協会第 78 回総会研究発表要旨』日本考古学協会, 2012 年 5 月, 立正大学 (東京)</p>
<p>【図 書】 (著者名、出版社名、書名、刊行年)</p>
<p>小林謙一・工藤雄一郎 『縄文はいつから!?地球環境の変動と縄文文化増補』新泉社, 2012 年 12 月</p>
<p>中澤寛将 『北東アジア中世考古学の研究—靺鞨・渤海・女真—』、六一書房, 2012 年</p>
<p>中央大学文学部考古学研究室調査報告 1 井出上ノ原遺跡, 中央大学文学部, 2013 年 3 月</p>
<p>中央大学文学部考古学研究室調査報告 2 大日野原遺跡遺構編, 中央大学文学部, 2013 年 3 月</p>
<p>【その他】 (知的財産権、ニュースリリース等)</p>
<p></p>
<p></p>